



日本GAP

仙台支部報 22

草 原

1

安藤流ミラクル・ワード

安藤澄雄 — 3

特別寄稿

烈 日

〈日本GAP会長〉久保田八郎 — 2

記

憶

太田節子 — 3

草 原 — 新 生 — 笠原 弘可

春川氏の驚異的体験

UFONコンタクトイヤー93、94号に連載された春川正一氏の体験はまさに驚異的である。同時にアダムスキー氏の体験を強烈に傍証したのである。GAP会員として、喜色満面、欣喜雀躍というところである。が、ややもすると浮かれてしまいそうな心をグッと抑え、この喜びをバネにして、ますます宇宙的活動を推進せねばならない。

絶賛！「愛の想念放射運動」

その意味でも、UFONコンタクトイヤー94号の山崎清美さんの「愛の想念放射運動」は、爽快なヒット記事である。宇宙の意識に全幅の信頼を置いた愛と平和の想念は、個人の変革はもとより、地球社会を浄化せしめる。この種の信念に基づいた想念は、その場限りのエネルギーでは終わらない。その想念に呼応して、宇宙の意識のパワーが働きはじめ、春川氏の情報によると、日本人は特に精神的影響力が強いということである。一人、また一人とこの運動が拡がり、意識に新しい青写真が刻まれることを期待したい。

意識にゆだねる

具体的にどうなるか？ 武器という武器が一瞬に消えて無くなるか、はたまた大国の政治家が、俄然平和を志向し始めた政策をガラリ変え始めるか、想像するだけ

けで楽しくなるが、我々は特段に限定して思念する必要はない。山崎さん言うところの、地球を抱きしめるような愛と平和の想念を放ち、宇宙の意識が発動して、必ず地球平和を実現させることを確信する。あとは意識にゆだねればよいだろう。

単純な繰り返しが良い習慣をつくる

想念を観察すると、如何に自分が同じパターンで一日考え続けているか分かる。また、良い想念習慣を持つため、プラスの想念を起す訓練をしてみようと、自分の中に、容易に降伏しようとしないうる習慣となつていくマイナス感情を発見する。しかし、それで止めては何もならない。あまり考え込まず、むしろあつさり、単純にピンとくる自作の言葉を心の中で繰り返す。最近、私は「意識以外のもので、私の中に入り込ませない」とい「私はプラスの想念しか発していない」といったミラクルワードを用いている。このとき、楽しく爽やかな感情を併（あわ）せて起こすと効果的である。

「どんな人間の美德も習慣となつてしまわぬ限り確かに身についたものにはならぬ」と、スイスの哲学者ヒルティが言っている。けだし、至言である。

こうして、宇宙的想念の習慣が身につけば、我々は以前の自分とは全く別人になつたということになる。アダムスキー氏の言うとおり「人間は活動する想念」だからである。

烈 目

幼少時代から続く
不思議な体験

<日本GAP会長>

久保田八郎

子供の頃から私の身辺は不思議な現象に包まれていた。小学校五年生の頃、この年の五月に親父が死んで一家はどん底におちいったが、三カ月後の夏のある夜、家の窓から道路を隔てた真向かいのお寺の本堂をながめていたら、突然、大屋根の上空を右から左へ水平にお月さんの倍ほどもあるオレンジ色の丸い光体がフワツと飛んだのを見て、肝をつぶしたことがある。戦前のことで、まだ空飛ぶ円盤とかUFOなどの言葉のない頃であるから、てっきり死んだ親父の火の玉が現れたと子供心に思っていた。昭和十年の八月だった。

離を超えていた。もつと小さかった子供の頃、付近で盗難事件があり、理由は忘れたが私は犯人を知っていた、それを内緒にしていた。お寺の庭で大人が五、六人集まって犯人はだれかと議論をしている。そこで出かけて行ってその輪の中に入り、犯人の名前を教えようとしたのだが、どういうわけか私は大人の輪に近づくことができず、まわりをぐるぐる回るだけで、あきらめて引き返した。何かの不可視の手で私の体があやつられていているような感じだった。以来五十年、不思議な現象は絶えない。今夏実施した「ギリシャ・トルコ・ローマ宇宙考古学の旅」の帰途、機内から外を見ているとき、目もくらむ強烈な閃光を連続三度目撃した。このことはユー・コ・ン95号の旅行記に詳述してある。

しかし私には絶対解けることのない最大の謎がある。それは「人間」という生物が宇宙空間に存在する理由だ。人間に「マインド(心)」という機能が付随する現象こそ不可思議きわまりない謎である。渋谷や原宿の盛り場を颯爽と歩く十代の男女の群れを見ると、それは肉体の活動というよりも「マインド(心)」の躍動という感じがする。喜怒哀楽にいろどられた「マインド(心)」こそ現象の世界における真の生き物と思われるのだ。この「マインド(心)」の実態を知り、観察し、コントロールすることにこそ、人間の意義があるのかもしれない。

少年の頃に新約聖書を涙とともに読んだような、あの「宗教的感傷」なるもの

は今の私にはないけれども、人間の「マインド(心)」の何たるかを知る上で読むことは多い。それはイエスの宇宙哲学を学ぶというよりも、むしろ二千年前の人間の「マインド(心)」と現代人のそれとを比較する上で大変興味深いのである。

たとえばルカ伝七・三一―三五には、同時代の人々を子供にたとえた説話が出てくる。人間というものはやんちゃなことを言って泣き叫ぶ子供みたいに得手勝手なことを言っていたがるものだとイエスがさとしているのである。不遜な言い方で申し訳ないが、現代人も当時の人々と大差はないようだ。これは人間が「どのよう」に考えるべきか「を考えない」というよりもむしろ「マインド(心)」の実態を考察する力に欠けているからだろう。

これからみてアダムスキーの「生命の科学」ほど重要な書物はないと私は考えている。これは現代の心理学や精神分析学を陵駕しているどころか全く別次元の「テイ・チング」であり福音であって、地球人が総力をあげて解明しなければならぬ課題がこの一書に充滿しているといつても過言ではない。

それはともかく、現代人のほとんどは盛り場の少年少女と同様に、肉体を生かす生命力で生きていてはならず、「マインド(心)」に振り回されて行動しているといえるだろう。

今夏十二回目の海外の旅に出かけたが、痛感したのはこの国の人間も皆同じだ

生活習慣等に若干の差があるだけで、根本的に相違はない。これは彼らも「マインド(心)」「だけで生きていくからだ」「マインド(心)」を完全にコントロールして人々こそ異質なのであって、それを私たちはスペース・ピープルと呼んでいるのである。

安藤流 ミラクル・ワード

安藤 澄雄

「仕事は順調ですか?」「はい、おかげさまで」「お忙しいですか?」「ええ、結構忙しいですね」

写真植字屋として独立して間もないが聞かれるたびに私は右のように答えている。実際には全く仕事がなくとも「おかげ様で」と答えるようにしている。これは何年か前に、静岡支部代表野口敏治氏が東京月例会の体験講演か意見発表でおっしゃっていたことを見習っているのである。

開業当時はあまりPR活動もしなかった。で本当は「これでやっていけるか」という不安もあったが、家内のアドバイスもあって、格好だけはドンと構えていた。そして聞かれるたびに「ええ、だんだん仕事が入ってきました」と答えておいた。そのかいあってか、今では全く営業活動をしていないにもかかわらず、徹夜で仕事をすることもしばしばだ。

考えてみるにこれは一種のミラクルワードに違いない。積極的な言葉によって自分にもそう信じ込ませていたのだろう。これはまた、一つの心理作戦でもある。どんな人でも、あまりはやっていないよう。な所に仕事を頼む気は起こらないだろう。「忙しい」と聞けば「ああ、あそこからは評判が良いのだな」と思うだろう。だから悪く言えばハッタリということになるのかも。しれないが……。

私にはもう一つ勝手な思い込みがある。それは「自分はスペース・ピープルに見守られている」ということだ。GAP活動に専念している限り、スペース・ピープルは私を見放さないと、私は信じている。本当のところはどうか知らないが、現に、静岡支部報に紹介されたような奇跡的なことも多く起きている。

先日にも不思議なことがあった。赤字の月が続いたので(開業時には資材投資でどうしても赤字になる)家内が少し不安の想念を抱いてしまった。私は「大丈夫さ」といつてその夜は休んだ。翌日の夕方、新聞の集金人が表札を見て「お宅、写植をやっているんですか。うちでも頼むんです。高いいんですよ」と切り出し、私の仕事の見積もりを聞くと、「安いですね。それじゃ今度からお宅に頼もうかな」と言ってくれた。早速家内に話すと「私が心配したからブラザーズが大丈夫、仕事はあるよ」という意味でこんな細工をしてくれたんじやないかしら」と言った。私もそう思った。実際は積極的かつのんきな私の想念(ミ

記 憶

太田 節子

喫茶店のガラス越しに、ボンヤリ町行く人々を眺めている。一人で喫茶店に入るのが好きで、支部月例会に出席する為町に出て来た時などは、決まってこの店に入る。道に面した側は総ガラス張である。誰も皆、喫茶店からの視線に注意を払う様子もなく、ごくごく自然に振る舞い通り過ぎて行く。店の中の私にとつては、まるで別世界を見ているようだ。

ふと思う。スペース・ピープルの方々も、おなじようにして、私達のことを見守って下さっているのだろうか。町行く人々と同様に、私達地球人が、そのことに気付かないでいるだけなのだろうか。「あんたは、小さい頃から不思議な子だったねえ。誰が字を教えた訳でもないのに、おじいちゃんに手紙を書いたりして」

今迄、何度同じことを母に言われただろう。母にとつてはそれほど不思議なことだったのだろうか。

私もまた何故かその日のことをよく覚えていて。今から二十七年前のことである。母は手紙というが、正確にはハガキである。私は祖父宛に書いたハガキを持って家の外に立っていたことを今でもハ

ツキリ覚えていた。当時の記憶を辿ってみると、確かに不思議なことが色々ある。例えば、初めて幼稚園に行った時、何々組というのをすぐ読めたこと。そして幼稚園に入ってから、毎月購入していた二冊の本を、自分一人で読んでいたことなどだ。今と違って幼稚園が、遊ぶことと専門だった時代、小学校一年生で、自分の名前が書けない子が沢山いた時代、テレビもまだまだ普及してない時代であり、もちろん我が家にもなかった。私は未っ子だが、兄達から教えられたことはいない。今もって、なぜ字がよめたのか、私自身判然としない。しかし、今も眼を閉じれば、祖父にハガキをかけた日の光景が浮かんでくる。不思議な記憶である。

月例会場一時変更

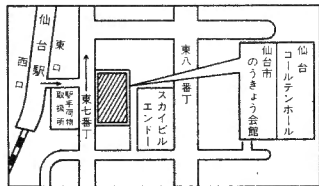
※仙台支部月例会場が九月から十二月まで変わります。

- ・毎月第四日曜日
- ・午後一時から四時三十分まで

会場

・仙台市農協会館
二階会議室
仙台市東七番丁122
☎〇二二二九七
五三一〇

※来年一月からは従来通り市民会館
仙台駅東口より徒歩で一分



お知らせ

第七回日本GAP
仙台・山形合同支部大会
日時 十一月二日(日)

午後一時～五時
会場 仙台第二ワシントンホテル
二階オリーブの間
仙台市大町二丁目二一十

☎(〇二二)二二二二二二
仙台駅から青葉通りをまっすぐ
進み、徒歩十五分、車で五分。

プログラム
Uコン94号に掲載のとおり。
ただし、司会者は都合により
清水敏恵さんに変更。

◎会費 二、〇〇〇円
(全員記念写真代は八〇〇円別納)

◎夕食会
大会終了後六時より八時まで大会と
同会場にて開催。

◎会費 五、〇〇〇円
※青葉城恋唄で有名な青葉通りに面し
た近代的なホテルが今回の会場。

◎観光
三十名乗り中型観光バスをチャーター
し、伊達政宗公をまつる瑞鳳殿、
青葉城跡、仙台市博物館、東北大附
属植物園等を巡遊。

◎会費 二、〇〇〇円
※宿泊はワシントンホテルを幹旋しま
す。(三十名分確保済み)宿泊、夕
食会、観光の申し込みはお早目に笠
原までハガキで。

編集後記

●今回、編者の依頼により久保田会長の書き下ろしの素晴らしい記事を掲載することができました。ワープロで打ちながら、やはり、生まれつき、何かある方なのだなあと、今更ながら感じました。次第です。この記事のため何度も推こうを重ねられる会長のその真剣な取り組み方には、頭が下がるばかりです。改めて厚く御礼申し上げます。

●安藤澄雄氏の記事は、やや期日が過ぎています。その後、増々仕事は順調のことです。ちなみに、我が支部報の表紙の題字も安藤氏の手によるものです。

●太田節子さんの「記憶」は、生命の連続を示唆する興味ぶかい記事です。

●山形、仙台合同主催による、「UFO写真展」が、八月十五日から十七日まで福島市本町の岩瀬書店三階ギャラリーで開催され盛況を博しました。紙面の関係で詳細は記せませんが、確かな手応えを感じた三日間でした。

●自己変革は、良き想念を保持することが基本だなぁと痛感する昨今です。(K)

日本GAP仙台支部報 二十二号

編集発行人 笠原弘可
発行所 日本GAP仙台支部
〒983 仙台市五輪一丁目
十六一十四一三〇六

☎(022) 29510725

昭和六十一年九月二十一日発行